

ノーベル賞の国際政治学

— ノーベル平和賞と日本：第二次世界大戦後の日本人候補、賀川豊彦（2・完） —

吉 武 信 彦

**International Politics of the Nobel Prize:
The Nobel Peace Prize and Japan, Toyohiko Kagawa,
a Japanese Nominee after World War II (2)**

Nobuhiko YOSHITAKE

はじめに

- 1 賀川豊彦の生涯
- 2 賀川豊彦のノーベル平和賞推薦に関する先行研究
- 3 1954年の推薦
 - (1) 推薦状況
 - (2) ノーベル委員会の評価（以上、第15巻第2号）
- 4 1955年の推薦（以下、本号）
 - (1) 推薦状況
 - (2) ノーベル委員会の評価
- 5 1956年の推薦
 - (1) 推薦状況
 - (2) ノーベル委員会の評価
- 6 1960年の推薦
 - (1) 推薦状況
 - (2) ノーベル委員会の評価

おわりに

4 1955年の推薦

(1) 推薦状況

1955年にも賀川はノーベル平和賞に推薦されている。推薦状は1通である。ノーベル財団のノミネーション・データベースとノーベル委員会の1955年年次報告書によれば、推薦者はノルウェー国会の5議員とある¹⁾。しかし、実際に推薦状を確認したところ、ノルウェー国会8議員に加えて15名の教会関係者など計23名が推薦状に署名している²⁾。教会関係者などの民間人にはノーベル平和賞の推薦資格がないため、ここではノルウェー国会議員8名としておく(表2参照)。8名の所属政党の内訳は、保守党1名、キリスト教国民党2名、労働党5名である。

推薦状は、A4用紙2枚の本文(タイプ打ち)と1枚の署名欄の計3枚からなる「ノーベル平和賞候補に関する提案」と題されたものである。日付は付されていない。ノーベル委員会の推薦状受領台帳でも、受領日は空欄となっており、不明である。この推薦状は、まず冒頭で「日本人、賀川豊彦にノーベル平和賞を授与するよう提案したい」と述べ、賀川を「日本人の中の偉大なキリスト教指導者、国民の先導者として、ノルウェー国民の間でも大変有名である」と指摘している。その後、推薦状は賀川の経歴、思想を具体的に紹介している。たとえば、以下のような説明がなされている。賀川は少年の時にキリスト教徒となり、神戸新川のスラムに入ることで仲間にショックを与え、約15年間そこで働いた。スラムは彼の実験室でもあり、『貧民心理の研究』などの著作、衛生、労働、賃金、経済などの社会問題についての論文を書いた。そして、賃金や労働にスラムの貧困の原因を見出し、労働者の組織化を活発に行なうようになった。1921年の神戸でのストライキ中、日本最初の労働組合を組織したが、そのため初めて刑務所に入った。

さらに、推薦状は、賀川が「キリスト教社会主義者」と呼ばれていること、あらゆる紛争で暴力に反対していること、そのため資本主義者とともに、左翼の革命主義者とも対立していることに触れている。また、賀川は日本における社会的、道徳的改革活動のあらゆる面で力をさき、労働者のための戦い、アルコール反対、売春反対を行なっている。小農の組織化、協同組合に基づく消費・生産の組織化などもしているとする。

そのほか、推薦状は平和面の活動についても触れている。まず1905年の日露戦争において日本の戦争政策に反対したことなどに触れ、民主主義が賀川の個人解放の戦いの自明の帰結であり、戦い的手段になったとしている。また、1928年に全国非戦同盟を組織したが、賀川の思想が日本で力をもつことはなかった。第二次世界大戦となったが、賀川は平和活動に力を使い、軍国主義や権力政治と戦い、法と正義に基づく国際的共存のために新たな基礎を作ろうと建設的な活動を行なったと述べている。

推薦状は、最後にこれまでアジア人がノーベル平和賞をもらっておらず、通常、欧米人に与えられてきたと指摘する。そして、「今や賀川に平和賞を受賞させよ。その決定は、アルベルト・シュヴァイツァーの時と同様に好意的に受け取られるであろう。というのも、この二人は同じ精神、

ノーベル賞の国際政治学

表2 ノーベル平和賞候補、賀川豊彦の推薦者一覧（1955、1956、1960年）

選考年	候補者	職業・肩書	推薦者	職業・肩書	推薦状日付（差出地）
1955	賀川 豊彦	社会事業家・作家	Sverre Bernhard Nybø	ノルウェー国会議員	日付なし（[オスロ?] その他、15名の教会関係者らの署名もある。
			Hjalmar Olai Storeide		
			Einar Hareide		
			Knut Severin Jakobsen Vik		
			Lars Sæter		
			Ivar Eikrem		
			Peter Kjeldseth Moe		
1956	賀川 豊彦	社会事業家・作家	Arne Askildsen	ノルウェー国会議員	日付なし（[オスロ?]
			H. C. Christie		
			A. R. Skarholt		
			Torkell Tande		
			Knut Toven		
			Ole Jørgensen		
1960	賀川 豊彦	社会事業家・作家	河上丈太郎	衆議院議員、社会党顧問	1960年1月25日付（東京）
			杉山元治郎	衆議院議員、社会党顧問、衆議院元副議長	1960年1月25日付（東京）
			北村徳太郎	元運輸大臣、元大蔵大臣、協和銀行頭取、衆議院議員（自民党）	1960年1月25日付（東京）
			天羽 英二	日本国連協会副会長、元駐イタリア大使、国連協会世界連盟執行委員会、欧亜協会会長・事務総長	1960年1月25日付（東京）
			小崎 道雄	日本基督教会連合総会前議長、壺南坂教会牧師、日本キリスト教協議会前委員長（12年間）	1960年1月25日付（東京）
			田中耕太郎	法学博士、最高裁判所長官、元文部大臣	1960年1月25日付（東京）
			東久邇稔彦	元首相	1960年1月25日付（東京）
			片山 哲	元首相、衆議院議員（社会党）	1960年1月25日付（東京）
			Emerson O. Bradshaw	大シカゴ教会連盟名誉職	1960年1月30日付（アメリカ・フロリダ）
			杉山元治郎	衆議院元副議長、賀川豊彦ノーベル平和賞推薦委員会委員長	1960年4月7日付（東京）、賀川関連本5冊の送付
			杉山元治郎	衆議院元副議長、賀川豊彦ノーベル平和賞推薦委員会委員長	日付なし、賀川関連本5冊の送付
			杉山元治郎	衆議院元副議長、賀川豊彦ノーベル平和賞推薦委員会委員長	日付なし、国会議員70名（社会党、民主社会党、自民党）の署名簿を送付
			館 俊三	衆議院議員（社会党）	
			久保 三郎	衆議院議員（社会党）	
			正木 清	衆議院議員（社会党）	
			西村 力弥	衆議院議員（社会党）	
			鈴木茂三郎	衆議院議員（社会党）	
			勝間田清一	衆議院議員（社会党）	
			風見 章	衆議院議員（社会党）	
			黒田 壽男	衆議院議員（社会党）	
			加藤 勘十	衆議院議員（社会党）	
			佐々木更三	衆議院議員（社会党）	
			内海 安吉	衆議院議員（自民党）	
			古川 丈吉	衆議院議員（自民党*）	
			淡谷 悠蔵	衆議院議員（社会党）	
			長谷川 保	衆議院議員（社会党）	
			山下 榮二	衆議院議員（社会党）	
			久保田鶴松	衆議院議員（社会党）	
太田 一夫	衆議院議員（社会党）				

吉 武 信 彦

選考年	候補者	職業・肩書	推薦者	職業・肩書	推薦状日付（差出地）
1960	賀川 豊彦	社会事業家・作家	阿部 五郎	衆議院議員（社会党）	日付なし、国会議員70名 （社会党、民主社会党、自 民党）の署名簿を送付
			石野 久雄	衆議院議員（社会党）	
			東海林 稔	衆議院議員（社会党）	
			松本 七郎	衆議院議員（社会党）	
			西村 関一	衆議院議員（社会党）	
			加藤 精三	衆議院議員（自民党）	
			浅香 忠雄	衆議院議員（自民党）	
			中村 英男	衆議院議員（社会党）	
			竹谷源太郎	衆議院議員（民主社会党）	
			今村 等	衆議院議員（民主社会党）	
			武藤 武雄	衆議院議員（民主社会党）	
			小澤 貞孝	衆議院議員（社会党）	
			下平 正一	衆議院議員（社会党）	
			中村 時雄	衆議院議員（社会党）	
			山中 吾郎	衆議院議員（社会党）	
			久保田 豊	衆議院議員（社会党）	
			谷川 和徳	衆議院議員（自民党）	
			高橋 禎一	衆議院議員（自民党）	
			生田 宏一	衆議院議員（自民党）	
			山口 好一	衆議院議員（自民党）	
			中原 健次	衆議院議員（社会党）	
			阪上安太郎	衆議院議員（社会党）	
			井岡 大治	衆議院議員（社会党）	
			中井徳次郎	衆議院議員（社会党）	
			河野 密	衆議院議員（社会党）	
			三宅 正一	衆議院議員（社会党）	
			矢尾喜三郎	衆議院議員（社会党）	
			島口重次郎	衆議院議員（社会党）	
			平岡忠次郎	衆議院議員（社会党）	
			中澤 茂一	衆議院議員（社会党）	
			金丸 徳重	衆議院議員（社会党）	
			茜ヶ久保重光	衆議院議員（社会党）	
			伊藤よし子	衆議院議員（社会党）	
			赤路 友蔵	衆議院議員（社会党）	
芳賀 貢	衆議院議員（社会党）				
永井勝次郎	衆議院議員（社会党）				
田中 武夫	衆議院議員（社会党）				
北山 愛郎	衆議院議員（社会党）				
石橋 政嗣	衆議院議員（社会党）				
井伊 誠一	衆議院議員（社会党）				
岡本 隆一	衆議院議員（社会党）				
川村 継義	衆議院議員（社会党）				
堂森 芳夫	衆議院議員（社会党）				
高田 富之	衆議院議員（社会党）				
堀 昌雄	衆議院議員（社会党）				
森本 靖	衆議院議員（社会党）				
櫻井 奎夫	衆議院議員（社会党）				
横路 節雄	衆議院議員（社会党）				
小林 進	衆議院議員（社会党）				
佐藤観次郎	衆議院議員（社会党）				
本島百合子	衆議院議員（社会党）				
栗林 三郎	衆議院議員（社会党）				
門司 亮	衆議院議員（社会党）				

註： 肩書は、基本的に推薦状に使われたものを載せた。

*の古川丈吉（1960年推薦者）については、推薦状には民主社会党と書かれているが、自民党所属と考えられるため、変更した。

出所：Det Norske Stortings Nobelkomité, Redegjørelse for Nobel Fredspris およびノーベル研究所史料より、筆者作成。

同じ人徳を有している」と結んでいる。

以上のように、ノルウェー国会議員の推薦状は、賀川の生涯を簡潔に紹介しつつも、日本における社会改革の中心人物の面を強調し、さらに賀川の平和主義にも言及している。第二次世界大戦中のことについては、軍国主義と闘ったことが簡単に触れられているのみである。

なお、ノーベル研究所の推薦状ファイルには、上記の推薦状以外にも賀川関係の資料が見出せる。それは、ノルウェーで賀川の推薦を準備中の関係者が、日本に在住し、長年賀川とも親交のあるノルウェー人牧師、エイクリ（Gabriel Eikli）に賀川に関する情報収集を依頼したもので、賀川の年譜、賀川が設立した施設のリストである。エイクリは、この推薦の話賀川本人に伝えたところ、「自分のようなものがノーベル賞などの資格はない」との返答であったため、賀川の長年の支持者、武内勝（神戸生活協同組合長）に接触し、資料を収集して発送した。また、賀川のノーベル平和賞推薦とエイクリの活動が日本の新聞（『産業経済新聞』1955年2月9日）で報道されたことから、駐日ノルウェー公使館のヴォークト（Hersleb Vogt）公使の知るところとなり、同公使も公使館の権限外の問題とはいえ、この件に「個人的に大きな関心」を寄せ、エイクリに情報提供を求めつつ、日本の新聞記事の翻訳、著作リストなどの賀川関係資料をノルウェー外務省経由でノーベル委員会に提出している³⁾。

（2）ノーベル委員会の評価

1955年には37候補（個人32、団体5）が平和賞に推薦されたが、賀川はそのうち新たに報告書が作成された8候補の一人であった。そのほか、以前に報告書が作成されたことのある2候補については、新しいことがないとして新報告書が作成されなかった⁴⁾。この事実からもわかるように、前年同様、賀川は候補が4分の1に絞られた際にも依然として候補として残っていたのである。賀川の報告書は、前年とは別のノーベル委員会顧問のヴォル（Knut Getz Wold）が執筆した。彼の職業は、事務所長となっている。

1955年報告書の賀川についての記述は前年に比べると極めて短く、半頁ほどのものである⁵⁾。最近の活動で特記されることを若干追加しただけのものであるが、前年の報告書にはない指摘が多い。

まず報告書は、ごく最近数年間の賀川の活動については極めて概略的な情報以外に入手することが残念ながらできなかったと断っている。それに続けて、「今日の日本での彼の立場は、論争的と考えられる。彼をふさわしい候補者と見なす者が第1線の人ではないにしてもいる。しかし、今日、賀川自身の大部分の同国人において彼の立場は戦前よりも弱まり、日本人以外が理解しているよりも弱まっている。戦争中の彼の追従が日本の社会生活の中で彼の立場、影響力を弱めたのである」としている。簡単な記述ではあるが、賀川の立場が日本において変化し、影響力が弱まっている現状に触れ、その原因を戦争中の「追従」に見出している。前年の報告書に比べると、否定的なニュアンスが強まっていると考えられる。

さらに「日本における賀川の評価としては、知識人あるいは哲学者というよりもまずは組織者としてのものである。彼は日本の複雑な平和運動内部の問題あるグループとのある種の結びつきで汚されてはいない。日本の政治において賀川は右派社会党に属しているが、主導的な力をもっているようには見えない。中国の新政府に対する彼の立場については、この政党の見方に沿ったもの以外には具体的な情報を入手することはできていない」と述べ、報告書は終わっている。ここでは、賀川の政治的立場について触れている。平和運動における「問題あるグループとのある種の結びつき」について詳しい説明はないが、平和運動内部の路線対立、政治対立に巻き込まれて、評価を下げるようなことにはなっていないということなのであろう。その意味では、肯定的な指摘と考えられる。しかし、政党支持では賀川が右派社会党に属しているとするものの、中心的な存在ではなく、中国（この場合、中華人民共和国）への見方でも独自の見方を提示しているとは見ていない。この指摘は、上述した賀川の影響力低下を現実の政治の面でも裏付けるものでしかなく、ノーベル委員会の賀川評価を下げることに繋がったと考えられる。

こうして、1955年の選考においても、賀川は途中まで有力候補とされながら、最終的に残ることはなかった。結局、1955年の選考では、1954年分として国連難民高等弁務官事務所が選ばれ、1955年分については1954年に続いて「保留」となり、選考は翌年に持ち越された。

5 1956年の推薦

(1) 推薦状況

1956年に賀川を推薦した推薦状は1通である⁶⁾。推薦者は表2の通りノルウェー国会の6議員である⁷⁾。前年の国会議員とは異なる議員から出されており、教会関係者の署名はない。6議員の所属政党の内訳は、保守党1名、自由党1名、キリスト教国民党2名、労働党2名である。

推薦状は、本文（タイプ打ち）と署名がA4用紙3枚に収められており、「ノーベル平和賞候補に関する提案」と題されている。本文の分量は、前年の推薦状と同程度である。日付は付されていないが、ノーベル委員会の受領日が1956年2月3日と推薦状表紙に手書きで記されている。まず推薦状は、「署名者は、ノーベル平和賞が日本人、賀川豊彦博士に授与されるよう、謹んで提案する」と述べている。それに続けて、「知っての通り、これまでアジア人は平和賞を受賞していない。それゆえ、我々の意見では、このアジアの息子に本年のノーベル平和賞を受賞させることは喜ばしい選択となろう」と指摘し、賀川への授賞の意義を前年の推薦状と同様に強調している。

その後、賀川の活動について簡潔な紹介がなされている。推薦状は、賀川が日本人ではあるが、国際的な次元を有していると述べ、恵まれない人々への貢献、社会改革・平和構築活動は、多くの言語に翻訳された彼自身の著作や多くの伝記を通じて世界中で知られているとする。賀川の人間性が極めて豊かで多面的なため、若干の言葉で描写することはできないとしつつも、強いて

言えば「平和構築者」であると述べ、「彼の活動した全人生は、平和問題への極めて大きく、利他的な貢献である」と指摘している。

それに続けて、賀川はスラムを社会研究の大きな実験場に、貧困の原因を分析し、その影響を示したことに触れ、社会面の活動を具体的に紹介する。長い間、彼は荒野の孤独な声であったが、賀川の演説や著作により、日本政府は1926年に日本の6大都市のスラムを6年間で根絶することを採択し、この目標のために4000万クローネを割り当てたとする。さらに推薦状は、労働者の環境改善のための活動についても触れ、賀川が日本で最初の労働組合を組織し、最初のストライキを指導し、この闘争で入獄することになったと述べている。また、賀川が多くの協同組合組織の創設者でもあるとしている。

推薦状の後半は、賀川の平和面の活動がまとめられている。それは、「賀川の逆説的な人間性により、彼は同時に熱烈な平和の友、大胆不敵な闘士になった。しかし、彼の武器は鋼鉄でできていたのではない。彼は、新しい世界に道を拓く力と理想にあふれた思想で戦っている。愛と精神力で彼は勝利するのである」というまとめで始まっている。平和活動の具体例としては、日露戦争に反対を表明し、裏切り者の烙印を押されたこと、徴兵制反対の署名をタゴール、ガンジー、アインシュタインらとしたため、国内の超国家主義者、軍人が彼をブラックリストに載せたこと、1937年に日本が中国を攻撃した際には、自らのイニシアティブで上海に行き、日本国民を代表して、日本軍が中国国民にもたらしたすべての困難と苦悶に赦しを乞い、帰国後に逮捕されたこと、第二次世界大戦前には訪米し、日米間の平和的解決を模索したことがまとめられている。

推薦状は、第二次世界大戦中のことには触れていない。すぐに、賀川が戦後も平和活動に参加した話になり、具体的な活動を列挙している。占領後、占領当局に国民の困難を訴える人間となったこと、世界連邦政府連盟の指導者の一人となり、副会長になったこと、日韓間で生じた多くの摩擦において平和問題促進のため発言をしたこと（李承晩大統領への公開書簡）、戦後、日本人の移民問題に取り組み、人口過剰問題解決のため支援を求めて南米に行ったことが触れられている。

推薦状の末尾では、賀川の著作活動について触れられ、彼が150冊以上の本を執筆し、その知識欲の結果、多くの学問研究に入っていったとする。最も読まれた本として、『死線を越えて』、『一粒の麦』、『貧民心理の研究』が具体的に挙げられている。

以上のように、この1956年の推薦状は、前年の推薦状と重なる部分は多いものの、平和面の活動などは、より具体的に詳しく紹介している。賀川が第二次世界大戦以前から平和運動にも積極的にかかわっていたことが強調されている。その際、前述の通り、第二次世界大戦中のことには触れていない。

1956年の推薦においても、前年同様、上記推薦状以外にも多くの資料がノーベル研究所の推薦状ファイルに見出せる。駐日ノルウェー公使館から、日本の新聞における賀川のノーベル平和賞推薦の報道記事の翻訳がノルウェー外務省経由でノーベル委員会に提出されている⁸⁾。また、

ノルウェー人牧師のエイクリが、日本の雑誌に載った賀川紹介論文に基づいた資料（推薦状ファイルには同論文の日本語原本もある）をノーベル委員会に送付している⁹⁾。そのほか、推薦状ファイルには、李承晩大統領に対する賀川の公開書簡のノルウェー語訳記事（エイクリが翻訳し、ノルウェーの新聞に掲載されたと考えられるもの）、1952年11月に広島で開催された世界連邦アジア会議の英文資料、賀川の著作リストなども含まれている。

（２）ノーベル委員会の評価

1956年には28候補（個人23、団体5）がノーベル平和賞に推薦されていた。このうち、賀川は新たに報告書が作成された6候補の一人であった。そのほか、以前に報告書が作成されたことのある3候補については、新しいことがないとして新報告書が作成されなかった¹⁰⁾。これに示されるように、候補が3分の1に絞られた際にも、賀川は残っていたのである。賀川に関する報告書の作成は、ノーベル委員会書記兼ノーベル研究所所長のショウが担当している。1954年から続いてきた賀川に関する報告書は、毎年異なる者が執筆したことになる。

1956年報告書における賀川についての説明は、ちょうど1頁ほどのものであり、前年よりも若干多い¹¹⁾。まず報告書は、ノルウェー国会の7名（実際は6名）が提案したことに触れ、提案とともに提出された資料において、賀川に関する新情報があったとする。報告書は、3点を挙げている。

第1に、1955年12月に賀川が韓国の李承晩大統領に送った公開書簡のことである¹²⁾。報告書では、この内容が詳しく紹介されている。公開書簡の理由として、韓国政府が近年、対馬海峡における日本の漁業に重大な困難をもたらしていることがあるとしている。さらに書簡では、賀川は、古代に朝鮮からの移民が日本文化の発展に大きな役割を果たしたこと、同時に現代において日本人が起こしたすべての被害を朝鮮人が許してくれるよう希望を表明したこと、日本と韓国がカナダとアメリカのように（あるいは、賀川の後のインタビューでの例示では、スウェーデンとノルウェーのように）並んで平和的に生きていけることを主張したとしている。これに対して、李承晩大統領は、返書において日本の侵略に対して著名人から示された誠実な悔恨を歓迎したが、漁業紛争においては韓国側からの譲歩の言質を与えなかったとしている¹³⁾。

第2に、報告書は賀川の世界連邦運動についても触れている。報告書は、「日韓の将来の連邦についての賀川の希望は、『世界運動（世界連邦政府）』への彼の前向きな態度の表現である」と述べ、さらに1954年に同団体のハーグ会議において副会長に選ばれ、日本および東アジアで同運動の思想を促進しようと精力的に活動しているとしている。1956年1月の大阪での日本支部の会合において、賀川は同運動の政策目標として4点（①日本国憲法の戦争禁止の堅持の活動、②新旧の植民地主義を終わらせるための活動、③平和的共存の尊重、④平和を維持しうる軍縮活動、真の自由、人権の促進）を公式化したとしている。

第3に、報告書は、賀川が原水爆実験の禁止を求める運動にもかわり、原水爆実験を自然の

均衡状態を破滅させるものと見ていることにも触れている。

以上のように、1956年報告書は、推薦状に添付された資料に基づき、前年の賀川の動向をまとめている。これまでの報告書に比べ、賀川の同時代の活動が具体的に記されている点は興味深い。特に、戦後の賀川が重視した日韓関係の改善、世界連邦運動の推進、核軍縮の促進といった分野での活躍は、これまでの報告書にほとんど言及されていなかった。それゆえ、これらの情報を通じて、賀川が現役の平和運動家であることはノーベル委員会にアピールできたであろう。しかし、残念なことにその活動に具体的な成果は出ていない。たとえば、李承晩大統領への公開書簡も日韓関係の問題解決には至らなかった。そのため、賀川の評価を高めることにはならなかったと考えられる。

結局、1956年の選考では、1955年分は「該当者なし」として処理され、1956年分については「保留」とされ、翌年に持ち越された。この持ち越された1956年分は、1957年の選考で最終的に「該当者なし」として処理されている¹⁴⁾。こうしてノーベル平和賞は、1955年、1956年と2年連続の「該当者なし」を記録することになった。これまでも「保留」、「該当者なし」は時折見られたが、最終的に「該当者なし」が連続したのは、第一次世界大戦中、第二次世界大戦中以来のことである。その後も、2012年現在、1966年、1967年に「該当者なし」が2年連続した時があるだけであり、戦時以外では極めて珍しい事例である¹⁵⁾。1950年代中葉に「該当者なし」が連続した理由は不明である。この時期、冷戦という緊張状態が「雪どけ」で若干変化する状況となり、国際情勢の進展をノーベル委員会が見極めようとしたこと（特に、1956年にはスエズ動乱、ハンガリー動乱という大事件が起こっている）、また、そうした状況下で傑出した個人、団体の「平和」活動を見出せなかったことが背景にあるのではないだろうか。

6 1960年の推薦

(1) 推薦状況

賀川は、1960年にもノーベル平和賞に推薦されている。推薦したのは、賀川とも面識のある日本の国会議員らである。これまでの推薦とは異なり、日本の関係者が積極的に動いたことがわかる。表2のように、1960年1月25日付けで、河上丈太郎衆議院議員、杉山元治郎衆議院議員、北村徳太郎衆議院議員、天羽英二元駐イタリア大使、小崎道雄霊南坂教会牧師、田中耕太郎最高裁判所長官、東久邇稔彦元首相、片山哲衆議院議員・元首相が個別にノーベル委員会宛の推薦状を執筆するとともに、賀川豊彦ノーベル平和賞候補推薦委員会¹⁶⁾ 委員長の杉山元治郎が衆議院議員70名から集めた署名簿も同時に提出されている。杉山元治郎は、さらに賀川の関連本を計10冊ノーベル委員会宛に送付している¹⁷⁾。そのほか、賀川と面識のあったアメリカ人ブラッドショウ（大シカゴ教会連盟名誉職）も賀川を推す推薦状を送っている。

以上の賀川についての推薦状は、すべてノーベル研究所の1960年推薦状ファイルに所蔵され

ていたが、ノーベル委員会の1960年年次報告書に名前が明記されている者は、河上丈太郎、杉山元治郎、北村徳太郎の3名のみである¹⁸⁾。ノーベル平和賞の推薦資格をもつ国会議員の主要人物を選んだ結果であろう。なお、日本側が送付した推薦状は、東京の賀川豊彦記念松沢資料館に所蔵されている写しとすべて一致した¹⁹⁾。

それでは、個別に推薦状を見てみよう。1960年1月25日付けの河上丈太郎衆議院議員の推薦状は、「1960年のノーベル平和賞候補として、私はここに心より謹んで賀川豊彦博士の名前を提出いたします。賀川博士の全生涯、そして世界平和と人道のためにその生涯を捧げたことは、極めて明白であり、徹底したものであり、良く知られておりますので、同氏はかかる榮譽に値いたします」というものである²⁰⁾。同日付けの杉山元治郎衆議院議員²¹⁾、北村徳太郎衆議院議員²²⁾、天羽英二元駐イタリア大使²³⁾、小崎道雄霊南坂教会牧師²⁴⁾、田中耕太郎最高裁判所長官²⁵⁾、東久邇稔彦元首相²⁶⁾、片山哲衆議院議員・元首相²⁷⁾の推薦状も、推薦者の住所、署名、肩書以外は同文である。賀川支持者が一丸となって推薦運動を展開していたことが読み取れるものである。なお、この1960年の推薦状の文面は、この時に初めて作成されたものではなく、1953年12月16日付けで片山哲衆議院議員が賀川を推薦した際の推薦状の文面と年号以外は同一のものである²⁸⁾。その意味では、1954年の選考以来、6年越しの推薦運動といえることができるかもしれない。

個別推薦者の推薦状とともに杉山元治郎が提出した衆議院議員70名の署名簿は、A4用紙に10名の署名欄があるものが7枚あり、その各用紙の上部に推薦文（英文）が印刷されている²⁹⁾。その推薦文の文面も、上記の個別推薦者のものと似ているが、より格式のある文章となっている。この署名簿には邦語版も存在することが賀川豊彦記念松沢資料館の史料で確認された。そのため、ここではその公式訳を引用しておきたい。すなわち、「私どもここに署名した者は、1960年度ノーベル平和賞候補者として賀川豊彦を推薦いたします。賀川の全生涯、その徹底した人道主義と世界平和への献身は、全世界の人々がひとしく認めており、授賞されることを望んでおります。賢明な委員の方々がこのことを御承諾くださると信じます」³⁰⁾。

そのほか、杉山ら推薦者は、賀川についての英文の年譜（6頁）も提出している³¹⁾。1902年から1959年までの賀川の平和問題を中心とした活動が時系列で簡潔に整理されている。この英文資料の冒頭では、賀川のノーベル平和賞推薦について、「もし賀川がノーベル平和賞を受賞すれば、平和運動はより成功し、人類の幸福、世界の平和が進展するであろう」と述べられている。この資料には、執筆者、作成日は明記されていない。この写しも賀川豊彦記念松沢資料館に所蔵されているのが確認された³²⁾。

以上の日本側からの推薦状に対して、ノーベル委員会書記兼ノーベル研究所所長のショウから、1960年1月25日付けの推薦状が無事に到着した旨の書簡（1960年1月30日付け）が杉山元治郎宛に出されている³³⁾。なお、推薦状の到着については、日本外務省も関心を寄せ、情報収集に動いている。すなわち、1960年2月23日、外務省本省はこの推薦状が推薦締切日の2月1日までにノーベル委員会に届いたかを確認するよう、板垣修在ノルウェー大使に訓令を発し、翌24日、

板垣大使は「ノーベル平和賞委員会は賀川氏に関する推せん書類を受理し、これを審理しうる状態にある旨確認した」と回訓している³⁴⁾。2月26日、杉山元治郎は、「外務省から一月提出の推薦書類が正式にノーベル平和賞委員会に受理されている旨、通知」を受けている³⁵⁾。

そのほか、推薦状はアメリカからも出されている。1960年1月30日付けのブラッドショウの推薦状は、A4用紙1枚からなる³⁶⁾。彼は、賀川をノーベル平和賞に推すアメリカの宗教指導者から出された推薦状の「フォロー・アップ」であるとまず断ったうえで、自己紹介を通して賀川をよく知る人間であることをアピールしている。それによれば、ブラッドショウは1936年以来、賀川と親しくしており、1936年、1941年、1950年、1954年のアメリカ講演旅行の際に約7500マイルも彼に同行したと述べている。また、1941年に賀川が平和ミッションとして訪米した際にも継続的にコンタクトを取り、1950年には約6ヵ月継続的に彼に付き添い、34州で彼を多くの聴衆に紹介したとする。そのうえで、ブラッドショウは、世界平和の領域で賀川よりも大きな影響力を持つ者は世界にはいないと述べ、さらにアメリカで世界平和のメッセージが非常に必要とされているときに、その必要を賀川ほど効果的に果たす者は知らないとも指摘している。以上の説明を行ない、ブラッドショウは賀川をノーベル平和賞に推薦している。最後に、ブラッドショウは賀川の生涯についてノーベル委員会に紹介するために2冊の本も同封すると記している。なお、本のタイトルは不明である。

(2) ノーベル委員会の評価

1960年には31候補（個人31）が平和賞に推薦されていた。このうち、新たに報告書が作成されたのは8候補であるが、賀川は報告書作成の対象となっていない。そのほか、以前に報告書が作成されたことのある1候補については、新しいことがないとして新報告書が作成されなかった³⁷⁾。これに示されるように、候補が3分の1に絞られた際に、賀川は残っておらず、早々に選考から脱落したのがわかる。

すでに見てきたように、賀川は1954年から56年にかけて有力な候補者として注目され続け、調査が継続された。しかし、1954年をピークにその後、賀川の評価が下がっており、推薦がなされなかった4年間にさらに注目度が落ちていたのであろう。4年ぶりに推薦された1960年の時点では、すでに賀川が現実の国際政治に大きな役割を果たしたというニュースはなく、過去の候補と見られた可能性が高い。

他方、上記のように、4回の推薦の中で、日本側の推薦運動は1960年に最も盛り上がり、その支援態勢も整ってきていたことを考慮すれば、日本側とノーベル委員会との間の時間差に気づかされる。この事実は、ノーベル平和賞を受賞することがいかに難しく、タイミングが極めて重要であることを改めて教えてくれるのである。

結局、1960年の選考結果は「保留」となり、受賞者は出ず、選考は翌年に持ち越された。1961年の選考では、1960年分の受賞者としてアフリカからの初の受賞者となる南アフリカの人

トゥーリが選出され、欧米出身者に偏った選考結果に変化が現れたのである。しかし、すでに指摘した通り、アジアからの受賞者はさらに時間を要することになった。賀川について言えば、彼がノーベル平和賞に推薦された4回の選考ともまずは「保留」の選考結果が出ていることを考えると、特に傑出した候補がいなかったという意味では賀川にも十分受賞のチャンスはあったのかもしれないが、賀川自身も最終的には多くの候補の中に埋没してしまったといえよう。

その賀川は、1960年のノーベル平和賞選考の最中である4月23日、召天した。それに伴い、日本における推薦運動は休止された³⁸⁾。推薦委員会の杉山元治郎委員長は、ノーベル委員会に賀川の逝去を通知するとともに、今後、運動を続けることの可否を問い合わせている³⁹⁾。

おわりに

本稿では、賀川がノーベル平和賞に推薦された4回の選考について、その経緯を紹介した。推薦者は、大きく2つのグループに分けられる。第1に賀川と長年の付き合いをもつ日本国内の政治家（主に日本社会党関係者）のグループである。1954年と1960年がこれに該当する。特に、1960年の推薦の際には衆議院議員70名が連署した署名簿も提出されている。第2に賀川を知る海外の関係者である。たとえば、同じ社会事業家であるアメリカのボルチ、賀川自身が1936年と1950年の2度訪問したことがあるノルウェーの政治家、教会関係者である。1954年、1955年、1956年がこれに該当する。1954年は、両方のグループからの推薦であった。

このように、賀川が日本国内のみならず、外国からも高く評価され、ノーベル平和賞に4回も推薦されていたことは、日本人としては画期的なことであろう。特に、4回のうち、3回はノーベル委員会の選考過程において絞り込まれた候補の中に残り、報告書が作成されていたのである。賀川が生涯を通して社会事業に専心し、社会改革により平和を生み出してきたことが、国際的にも高く評価された結果であろう。しかし、賀川は結局ノーベル平和賞を受賞することはなかった。

第2章において整理したように、賀川がノーベル平和賞を受賞できなかった理由としてこれまで4つの仮説が挙げられていた。すなわち、第二次世界大戦中における賀川の言動（特に、軍部への協力と対米批判放送）、第二次世界大戦後の反核運動に対する賀川の支持、ノーベル平和賞選考過程におけるノーベル委員会の欧米偏重の傾向、賀川推薦者の不十分な推薦運動の4点である。

ノーベル委員会の報告書と選考結果を見る限りでは、第二次世界大戦後の反核運動に対する賀川の支持は、関係が薄いと思われる。1956年の報告書に賀川が原水爆実験禁止にかかわり、それが自然の均衡状態を破滅させるものと見ていたことが言及されている。しかし、それは否定的なニュアンスのものではない。その後、軍縮運動、核実験禁止運動でノーベル平和賞を受賞する候補（たとえば、1959年受賞のノエル＝ベーカー [Philip John Noel-Baker]、1962年受賞のポーリング [Linus Carl Pauling]）も出ていることを考えれば、賀川がその分野で大きな影響力を行

使できていれば、逆に注目を浴びたのかもしれない。

また、賀川推薦者の不十分な推薦運動も同様に受賞できなかった理由とはいええないであろう。1960年の大規模な推薦運動が効果を発揮しなかったことを考えると、推薦運動は必須のものではない。推薦運動よりも、誰が推薦したのかが大きいかもしれない。ノーベル委員会が重要な人物と判断する推薦者が推す候補は、それだけ有利となろう。たとえば、1954年には、1946年のノーベル平和賞受賞者で国際的知名度の高いボルチが賀川を推薦していたが、簡単な推薦状にもかかわらず、賀川に対するノーベル委員会の関心を高め、有力候補に押し上げる効果をもったと考えられる。

他方、4つの仮説のうち、第二次世界大戦中における賀川の言動（特に、軍部への協力と対米批判放送）とノーベル平和賞選考過程におけるノーベル委員会の欧米偏重の傾向は、影響を完全に無視することはできないであろう。第二次世界大戦中における賀川の言動（特に、軍部への協力と対米批判放送）は、ノーベル委員会の報告書を見る限り、ノーベル平和賞を受賞できなかった直接の理由とはいええないが、日本において賀川の影響力を下げた要因として見られており、間接的な理由と見なすことができよう。

また、ノーベル平和賞選考過程におけるノーベル委員会の欧米偏重の傾向も、アジアからの受賞者がその後も1973年のレ・ドゥク・ト（Le Duc Tho、北ベトナム、辞退）、1974年の佐藤栄作元首相まで出なかった事実と考え併せると、無視することはできない。しかし、1955年、1956年のノルウェー国会議員の推薦状において、アジアから受賞者が出ていないことに直接の言及があり、ノーベル委員会もその点の認識は十分あったであろう。実際に、賀川に関する報告書を見る限り、ノーベル委員会は独自に様々な文献に当たり、極めて詳細な報告書を作成しており、賀川を候補として真剣に検討していたことがわかる。その点では、ノーベル平和賞選考過程におけるノーベル委員会の欧米偏重の傾向は、一般的な背景説明としては当てはまるが、賀川落選の主たる理由とまではいええないであろう。

1954年から56年までの3つのノーベル委員会報告書を読み比べていえることは、賀川に対する関心が1954年をピークに薄れていったことである。当時、日本国内で賀川の影響力が弱まっていたことがノーベル委員会の関心を弱めたことは確かであろう。その背景として、第二次世界大戦中の政府、軍部などとの関係がマイナスに働いたことも否めない。第二次世界大戦中の言動が日本国内で賀川の評価を下げ、戦後の彼の人気を教会関係者らに限定される結果を招いたのかもしれない。無論、賀川は戦後も世界連邦運動などの平和運動や言論活動を活発に展開しているが、それが戦後の国内外の現実政治に対して大きな影響力をもったとはいええない。戦前の社会事業家としての活躍に比べると、低い評価とならざるを得ないであろう。

ノーベル委員会の報告書における賀川紹介に顕著なように、ノーベル委員会はその候補がもつ影響力を重視していたことがわかる。それには、2重の意味がある。1つはその候補が実際の国際政治にどれだけの影響力を与え、ノーベル委員会の望む「平和」に貢献でき、それを実現でき

るのかというものである。もう1つは、ノーベル委員会、ノーベル平和賞の存在を世界に示し、その権威をどれだけ高めてくれるのかというものである。この2つの影響力という観点で、第二次世界大戦後の賀川は必ずしも十分な候補ではなかったのであろう。賀川の事例を考えると、前述のように推薦されるタイミングが重要であったのかもしれない。国内外で彼の影響力が強く、社会改革に専心していた戦前に賀川が推薦されていれば、賀川の評価は異なったものになっていたかもしれない。無論、1955年の賀川推薦状に言及のあるシュヴァイツァーでさえ、ノーベル平和賞を1953年に1952年分として受賞したことを考慮すれば、戦前であってもノーベル委員会の支持を得ることは容易なことではなかったであろう。

(よしたけ のぶひこ・高崎経済大学地域政策学部教授)

註

- 1) ノーベル財団のノミネーション・データベース (<http://nobelprize.org/nobel_prizes/peace/nomination/database.html>、2012年12月8日アクセス)。Det Norske Stortings Nobelkomité, *Redegjørelse for Nobels Fredspris 1955* (Oslo: Grøndahl & Søn's Boktrykkeri, 1955), s.9.
- 2) Framlegg om kandidat til Nobels fredspris, PFL 60/1955 i Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1955.
- 3) Gabriel Eikli, "Opplysninger om Dr. Kagawa," jan. 26. 1955, "Dr. Kagawa's Sosiale Verferdsinstitusjoner," jan. 28. 1955. Hersleb Vogt, "Nobels Fredspris. Japaneren Toyohiko Kagawa," Nr.42, Tokio, 22. februar 1955. 「本年度ノーベル平和賞有力候補に賀川豊彦氏」(『産業経済新聞』1955年2月9日朝刊)。
- 4) Det Norske Stortings Nobelkomité, *Redegjørelse for Nobels Fredspris 1955*, s.5. 賀川以外の7候補とは、フランス人政治家(第4共和政初代大統領)のオリオール(Vincent Auriol)、ドイツ人平和主義者のベール(Gertrude Baer)、イギリス人政治家のデイヴィス(Clement Davies)、イギリス外相のイーデン(Sir Anthony Eden)、ネルー、国連難民高等弁務官事務所、婦人国際平和自由連盟である。また、新しいことがないとして新報告書が作成されなかった2候補とは、前年にも候補となっていたアトリーとブックマンである。
- 5) *Ibid.*, s.53.
- 6) Forslag om kandidat til Nobels fredspris, PFL 49/1956 i Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1956.
- 7) 推薦状には6名の署名しかないが、ノーベル委員会の1956年年次報告書には7名のノルウェー国会議員と記されている。6名が正しいと考えられる。Det Norske Stortings Nobelkomité, *Redegjørelse for Nobels Fredspris 1956* (Oslo: Grøndahl & Søn's Boktrykkeri, 1956), s.9.
- 8) Hersleb Vogt, "Nobels Fredspris. Japaneren Toyohiko Kagawa," Nr.67, Tokio, 14. februar 1956, "Nobels Fredspris. Japaneren Toyohiko Kagawa," Nr.104, Tokio, 16. mars 1956.
- 9) Brevet fra Gabriel Eikli til August Schou, den 23. mai 1956. 雑誌論文の邦語名は、以下の通り。村島帰之「平和への闘い——賀川豊彦の半生——」(『ニューエイジ』第7巻第11号、1956年3・4合併号)。
- 10) Det Norske Stortings Nobelkomité, *Redegjørelse for Nobels Fredspris 1956*, s.5. 賀川以外の5候補とは、ドイツ首相のアデナウアー(Konrad Adenauer)、スペイン人チェロ奏者のカザルス(Pablo Casals)、イギリス人文学研究者のマレー(Gilbert Murray)、フィンランド大統領のパーシキヴィ(Juho Kusti Paasikivi)、インド人宗教哲学者・副大統領のラーダクリシュナン(Sarvepalli Radhakrishnan)である。また、新しいことがないとして新報告書が作成されなかった3候補とは、前年にも候補になっていたベール、イーデン、婦人国際平和自由連盟である。
- 11) *Ibid.*, s.26-27.
- 12) 賀川豊彦「李承晩大統領に訴える」(『毎日新聞』1955年12月8日朝刊)。同書簡は、以下に再録されている。賀川豊彦全集刊行会編『賀川豊彦全集 第24巻』(キリスト新聞社、1964年)、440～441頁。横山春一『賀川豊彦傳(増訂版)』(警醒社、1959年)、535～538頁。
- 13) 「日韓友好のために——李大統領、賀川氏に返書——」(『毎日新聞』1955年12月21日朝刊)。12月19日付けの同書簡は、以下に再録されている。横山、前掲『賀川豊彦傳(増訂版)』、538～542頁。この横山の著書によれば、賀川はこの件を鳩山一郎首相、重光葵外相に伝達し、外務省を中心とする折衝に任せられた。そのため、横山は「賀川李承晩会談に期待をかけてみた人々は、この幕切れに失望落胆せざるを得なかつた」を記している(544頁)。また、李の返事については以下の文献にも言及があるが、同書は「強い対日主張そのままの応酬がみられた」と述べ、日韓交渉に進展が見られなかったことを指摘している。鹿島平和研究所編、吉澤清次郎監修『日本外交史第28巻 講和後の外交 I 対列国関係(上)』(鹿島研究所出版会、1973年)、70頁。
- 14) 1957年の選考で、25候補(個人22、団体3)のうち絞り込まれ、報告書が作成された7候補は、ベール、スイス人法律家のフーバー(Max Huber)、カナダ政治家のピアソン(Lester Pearson)、ラーダクリシュナン、アメリカ人政治評論

ノーベル賞の国際政治学

- 家のストレイト (Clarence Streit)、国際民間サービス、婦人国際平和自由連盟である。ピアソン、ストレイト、国際民間サービス以外の4候補は以前にも候補として絞り込まれ、報告書が作成されたことがあったが、全候補とも新たに報告書が作成されている (Det Norske Stortings Nobelkomité, *Redegjørelse for Nobels Fredspris 1957* (Oslo: Grøndahl & Sønns Boktrykkeri, 1957), s.5.)。1957年分の受賞者としては、スエズ動乱に対する対応でピアソンが選ばれている。
- 15) 拙稿「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル平和賞の歴史的発展と選考過程——」(『地域政策研究』第13巻第4号、2011年2月)、34～35頁。
 - 16) 賀川豊彦ノーベル平和賞候補推薦委員会とは、賀川を知る杉山元治郎ら関係者が設立したもので、1960年2月18日に正式に動き出した団体である。委員長には杉山元治郎、事務局長には横山春一が就いた。同委員会に関する史料は賀川豊彦記念松沢資料館に所蔵されている。活動については、同委員会の月報を参照。賀川豊彦ノーベル平和賞候補推薦委員会『月報』第1号および第2号(「ノーベル平和賞候補として賀川豊彦氏を推薦す」A404-00001t、賀川豊彦記念松沢資料館)。
 - 17) 1960年4月7日付けで送付された5冊の本は、以下の通り。E. O. Bradshaw, *Unconquerable Kagawa*. V. E. Marriott, *Kagawa and Cooperatives*. W. K. Anderson, *Christian World Mission*. Haruichi Yokoyama, *Story of Kagawa*. Haruichi Yokoyama, *Life of Toyohiko Kagawa*. 日付なしで送付された5冊の本は、以下の通り。J. M. Trout, *Kagawa, Japanese Prophet*. C. M. Simon, *A Seed Shall Serve*. C. M. Simon, *Kagawa*. Kagawa, *Fellowship Bulletin*. T. Kagawa, *The Economic Foundation of World Peace*.
 - 18) Det Norske Stortings Nobelkomité, *Redegjørelse for Nobels Fredspris 1960*, (Oslo: Grøndahl & Sønns Boktrykkeri, 1960), s.9. なお、3名のうち、河上は「Jotaro Kawahari」、杉山は「Motojuro Sugiyama」と誤った表記で記録されている。ノーベル委員会の推薦状受領台帳によれば、河上と杉山の推薦状は1960年1月30日に受領され、北村の推薦状は同年2月4日に受領されている。
 - 19) 「ノーベル平和賞関係 (委員会へ送付書類)」A404-00002t、賀川豊彦記念松沢資料館。
 - 20) Letter from Jotaro Kawakami to the Norwegian Nobel Committee, dated 25 January 1960, PFL 51/1960 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1960.
 - 21) Letter from Motojiro Sugiyama to the Norwegian Nobel Committee, dated 25 January 1960, PFL 52/1960 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1960.
 - 22) Letter from Tokutaro Kitamura to the Norwegian Nobel Committee, dated 25 January 1960, PFL 71/1960 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1960.
 - 23) Letter from Eiji Amou to the Norwegian Nobel Committee, dated 25 January 1960, PFL 51/1960 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1960.
 - 24) Letter from Michio Kozaki to the Norwegian Nobel Committee, dated 25 January 1960, PFL 51/1960 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1960.
 - 25) Letter from Kotaro Tanaka to the Norwegian Nobel Committee, dated 25 January 1960, PFL 51/1960 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1960.
 - 26) Letter from Naruhiko Higashikuni to the Norwegian Nobel Committee, dated 25 January 1960, PFL 51/1960 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1960.
 - 27) Letter from Tetsu Katayama to the Norwegian Nobel Committee, dated 25 January 1960, PFL 51/1960 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1960.
 - 28) Letter from Tetsu Katayama to the Nobel Peace Prize Committee, dated 16 December 1953, PFL 8/1954 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1954.
 - 29) 日付はない。70名の氏名は、表2の通り。
 - 30) 「ノーベル平和賞候補として賀川豊彦氏を推薦す」A404-00001t、賀川豊彦記念松沢資料館。
 - 31) "We Recommend Toyohiko Kagawa as a Candidate for the Nobel Peace Prize. The World State and the Movement for World Peace," PFL 51/1960 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1960.
 - 32) 「ノーベル平和賞関係 (委員会へ送付書類)」A404-00002t、賀川豊彦記念松沢資料館。
 - 33) Letter from August Schou to Motojiro Sugiyama, dated 30 January 1960 (「ノーベル平和賞関係 (委員会へ送付書類)」A404-00002t、賀川豊彦記念松沢資料館)。
 - 34) 「第5号、昭和35年2月23日、藤山大臣発在ノールウェー板垣大使宛、賀川豊彦氏のノーベル平和賞候補推薦の件」、「第11号、昭和35年2月24日、板垣大使発藤山大臣宛、賀川豊彦氏のノーベル平和賞候補推せん」(『ノーベル賞関係雑件』外務省外交史料館、マイクロフィルム・リール番号I0011)。
 - 35) 賀川豊彦ノーベル平和賞候補推薦委員会『月報』第1号。
 - 36) Letter from Emerson O. Bradshaw to the Norwegian Nobel Committee, dated 30 January 1960, PFL 51/1960 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1960.
 - 37) Det Norske Stortings Nobelkomité, *Redegjørelse for Nobels Fredspris 1960*, s.5. 報告書の作成された8候補とは、アメリカ銀行家のブラック (Eugene R. Black)、イタリア人哲学者・国法学者のカンパノーロ (Umberto Campagnolo)、アメリカ人ジャーナリストのカズンズ (Norman Cousins)、アメリカ銀行家のイートン (Cyrus S. Eaton)、アメリカ大統領のアイゼンハワー (Dwight D. Eisenhower)、オーストリア人政治家のヘルメール (Oskar Helmer)、ネルー、サンガー

吉 武 信 彦

である。また、新しいことがないとして新報告書が作成されなかった1候補とは、ラーダクリシュナンである。

38) 賀川豊彦ノーベル平和賞候補推薦委員会『月報』第2号。

39) Letter from Motojiro Sugiyama to the Nobel Peace Prize Committee, no date. 同書簡の写しが賀川豊彦記念松沢資料館に所蔵されている(「ノーベル平和賞関係(委員会へ送付書類)」A404-00002t、賀川豊彦記念松沢資料館)。なお、同書簡では、アメリカ『タイム』誌の1960年5月2日号掲載の賀川記事に「賀川が……アメリカとの戦争を支持した」との文言があることへの批判もなされている。『タイム』誌記事とは、以下のものである。“Obituary,” *Time*, Vol.75, Issue18, 2 May 1960, p.83. 杉山の書簡に対するノーベル委員会の返信は、賀川豊彦記念松沢資料館の資料には見当たらない。ノーベル委員会から返信が出されたか否かについては不明である。

付記

ノルウェー・ノーベル研究所での調査では、多くの研究所スタッフに大変お世話になった。また、国内の調査では、賀川記念館参事の西義人氏、財団法人雲柱社賀川豊彦記念松沢資料館学芸員の杉浦秀典氏、染井千佳氏に大変お世話になった。ここにお名前を記し、お礼申し上げます。

本年度をもって本学地域政策学部を定年退職される塩田咲子先生、三瓶憲彦先生、吉田俊幸先生には、これまでの御指導に対して心よりお礼申し上げます。御研究のますますの御発展と御健勝を祈念いたします。

本稿は、2012年度高崎経済大学研究費による研究成果の一部である。高崎市および高崎経済大学に感謝申し上げます。